

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2014 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			研究科	キリスト教学	専攻	キリスト教学
研究代表者 (2015 年 3 月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名					
	キリスト教学研究科・ キリスト教学専攻・5 年	岡 田 理 香 印					
指導教員	所属・職名	氏 名					
	大学院キリスト教学研究科 文学部キリスト教学科・教授	久 保 田 浩 印					
自然・人文・社会の別	人文	個人・共同の別		個人			
研究課題	C. S. ルイスのキリスト教思想						
研究組織 (2015 年 3 月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名					
	キリスト教学研究科・ キリスト教学専攻・5 年	岡 田 理 香					
研究期間	2014 年度						
研究経費	(支出金額) 200,000 円／(採択金額) 200,000 円						

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はイギリスの作家 C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) を研究対象とし、ルイスの著作をもとに彼の「キリスト教」の特徴を明らかにするものである。C. S. ルイスを文学的な見地における研究だけに留めることなく、キリスト教学の視点からも総合的に見ることを目的とする。その上で、C. S. ルイスをキリスト教弁証家と捉え、彼の生きた時代の英国の歴史と宗教的な背景等を踏まえた上で、当時の「神話」研究が興隆していたことにも着目する。さらに、C.S. ルイスの「神話」と「キリスト教」をどのように関連づけることができるかについても考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[C. S. ルイス] [キリスト教文学] [イギリス文学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2014 年度 SFR 研究の期間は、本研究の博士課程後期課程 5 年目に該当した。そのため研究内容の大半を博士論文の中間報告書と、博士論文の下書きに反映させた。

最初に、C. S. ルイスの伝記的事実や時代的背景という外的データを調査したものをまとめることができた。論文作成に必要とされる一次資料のデータ化が急務であったため、デジタル化による保存を行ないつつ、資料の整理を行った。特に英国オックスフォード大学図書館で収集した資料である C. S. ルイスの直筆資料、ノート、メモ、タイプ原稿や未発表原稿など、コピーが禁じられていたために写真撮影したものを中心として、それらのデータ化を行った。

その上で上記の資料をもとに、C. S. ルイスが影響を受けた思想や作品、時代背景といった外部的な要素を調査した。具体的には、まず 19 世紀から 20 世紀の時代背景の歴史的な視点からの論証と、それに基づきながら C. S. ルイスの出自、彼のキリスト教回心への経緯、そして彼の思想の源となっているとされる、彼が影響を受けた人々の思想、著作を概観した。さらに、伝記作家らによる C. S. ルイス伝記などを確認しつつ、C. S. ルイスの書簡や日記、自伝と照合させ、英国で得た一次資料と合わせて精読した。

そして、C. S. ルイス研究をいくつかの分野に分類してまとめ、自らの研究に近い先行研究についての分析、考察を深めた。これらを踏まえた上で、C. S. ルイスのキリスト教信仰の特質を汲み取り、彼の信仰がアングリカンのみならずカトリックや他プロテスタント諸派にも受容されてきた信仰の特徴とはいかなるものであったかを探求した。

以上のような経緯で 2014 年度の研究を行った。成果の概要が以下の通りである。

1. 先行研究と目的の設定

先行研究の中でも本研究に関わる研究のいくつかに的を絞って着目した。そして大きく分けて三つの動向についての研究を収集した。第一に、伝記などルイスの全体像を見るもの、第二に、キリスト教神学者らによるルイスの著作からキリスト教思想を汲み取る研究、そして第三に、最も蓄積のある文学研究であった。それらの先行研究を踏まえた上で、本研究においては、C. S. ルイスの作品から彼の思想や信仰を拾い、規定の枠にとらわれず、彼の言葉そのものに目を向けて、その思想を紐解いていくことを本研究の目的として設定した。

2. C. S. ルイスの全体像

C. S. ルイスの「キリスト教」の考察に入る準備段階として、彼の全体像に照射した先行研究を中心に踏襲しつつ、彼の「キリスト教」への「回心」と、「神話」との関連について着目し、検討した。中でも彼の自伝『喜びの訪れ』と、先述の通り、データ化に今回時間を割いた未刊行資料などから、彼の生涯を客観的、主観的に追った。さらに、彼の著作『天路逆程』を取り上げ、彼がその執筆過程で「キリスト教信仰へと後戻りした過程を記述しようと思う」と表現したことを汲み取った。彼の「キリスト教」への道のりがこの作品で間接的に物語られている特徴から、吟味された形で彼が「キリスト教」を受け入れた経緯を読み取り、彼にとっての「キリスト教」の源と、そこへの道のりを追うことができた。

研究成果の概要 つづき

3. C. S. ルイスの「煉獄」

「神話」という解釈をきっかけに、彼の「回心」経緯を見たことに加えて、彼の持つ「煉獄」についての独自の考え方に焦点を当てて考察した。特に、先に扱った作品『天路逆程』や、「煉獄」を明確にモチーフとした作品『天国と地獄の離婚』を取り上げ、彼の記述を見ながら、作品に提示された「煉獄」は全く彼独自のものでアングリカンが否定するものでもローマ・カトリックが肯定するものでもない、新しい特有の「キリスト教」から生じた「煉獄」であるということを分析することができた。

4. 「煉獄」と関連した「救済」

「煉獄」についての独自性を瞥見した後、それに関連して、彼の考える「救済」とはいかなるものであるかという問いを立てた。中でも彼が『ナルニア国物語』の最終巻で描出している死後の世界に相当する場面で、彼独自の「煉獄」を投影しつつ、「救済」が描かれていることに着目した。特に、他宗教の者の「救済」の可能性を提示していることについても検討できた。

5. 「救済」と関連した「自己放棄」

「煉獄」と「救済」を関連づけて見たことを踏まえて、彼が「真実の神話」と表現したキリストの物語を、どのように人々に伝えたのかについて瞥見した。特に『キリスト教の精髓』を中心に、『痛みの問題』や『奇跡論』にも同時に目を向けつつ、彼が「自己放棄」して神に従うことを勧めている言葉に着目した。彼の「自己放棄」の概念を取り上げながら、彼が「真実の神話」を語る中でキリストの生き方が「自己放棄」そのものであったと彼が捉えていることを見た。その過程では、彼が師としているジョージ・マクドナルドが提示したキリストの物語がいかなるものであったかを概観し、その上で、C. S. ルイスが考え、人々に提示した「自己放棄」について検討した。

6. 「ファンタジー」、「神話」という執筆行為

C. S. ルイスの著作から、彼の「ファンタジー」という執筆行為について拾い、彼が「ファンタジー」を最も好む執筆形態としていることを瞥見した。さらに、J. R. R. トールキンのエッセイに書かれたファンタジーに対する考え方に彼が同意していることや、「神話」の形式についても C. S. ルイスの記述を収集することができた。文学批評を中心とした著作『批評における一つの実験』で、彼が「神話」を 6 分類した上で、「神話」を読む体験は、怖れかしこむ経験をも生むものであると考えていることを拾い出した。その上で、彼の執筆行為と、先に考察した彼の概念を連関させて分析した。

7. まとめ

C. S. ルイスの著作等から「煉獄」「救済」「自己放棄」の 3 概念を取り上げつつ、彼の執筆行為との関連について考察し、彼の「キリスト教」とは、執筆行為そのものであったと結論づけることができた。

上記内容の一部を博士論文の中間報告書として提出し、受理された。

また、3 人の有識者に原稿の校閲を依頼して、彼らにもご指導いただいた。そして結論部分を含む博士論文の下書きが完成した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・岡田理香、「『神のいない時代のバイブル・ストーリーズ』に見る無神論的キリスト教作品の意味」、キリスト教文学研究(日本キリスト教文学会)、第 31 号、2014 年、91-105 頁。
- ・岡田理香、「C. S. Lewis の *The Last Battle* にみる終末観」、工学院大学共通過程研究論叢、52-1 号、2014 年、23-34 頁。
- ・岡田理香、「C. S. ルイスが『キリスト教の精髓』で示したキリスト教信仰」、*DEREK* (立教大学大学院キリスト教学研究科)、34 号、2014 年、43-64 頁。

④ その他

- ・研究成果の一部を、工学院大学情報学部において春学期後半に「C. S. ルイスの『ナルニア国物語』」という内容で講義した。
- ・博士論文中間報告書を提出し、口頭試問を通過して受理された。